

DRAMA かながわ 78

神奈川県演劇連盟事務局：神奈川県横須賀市米が浜通1-3 Tel.045-263-4472



青少年のための芝居塾2019 文：マシュマロ・ウェーブ 木村健三

2019年8月23日～28日 神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI

芝居塾を通して

令和元年の「青少年のための芝居塾」はマシュマロ・ウェーブが担当しました。「青少年のための芝居塾」は、若者たちが経験を問わず演劇に携わることができ、演劇を通じて社会性を身に付け、様々な人たちとの共同作業を成し遂げる面白さや創作の楽しさを知ることができる、TAKの活動の核となる、誇るべき有意義な事業です。今年度の「青少年のための芝居塾」は、以下の4点に主眼をおいて、3ヶ月半の濃密な活動をお

こない、TAKおよび神奈川県国際文化観光局のバックアップにより、十分な成果をあげることができました。

- ①スタジオHIKARIのスペースを活かしたストレート・プレイを上演し、より多くの観客に見てもらう機会を設け、塾生と共に劇団も成長する。
- ②塾生の意思を尊重しつつ、塾生を中心としたスタッフ・ワークを組み、塾生の主体性の向上とコミュニケーション能力の育成を図る。
- ③公演の情報宣伝を、塾生を中心に検討・実施し、自分

達の活動を広く世間に広める楽しさを実感してもらおう。
④様々な視点から幅広く演劇を学んでもらうため、外部講師を招き、講座や発表会を実施する。

4月より参加者の正式募集を開始し、GW明けに応募を締め切りました。神奈川県舞台芸術担当部長、TAK事務局長などを審査員に招いたオーディションを開催し、14名の合格者とともに活動をスタートしました。5月～6月は土日を中心に外部講師による講座を開催し、演劇の歴史、劇作、楽器演奏、フィジカル・シアター、スタッフ・ワークなど、8月の本公演に直結する様々な知識・技術を習得しました（講師：亜門虹彦、

椎名泉水、yanomi、ストレスフリー、古屋治男、倉本泰史）。7月は、即興による集団創作を学び、7月20日（土）にスタジオHIKARIで「いきものはいきるためにいきる一脱皮」を上演しました。夏休み期間中に入ってから、本公演「ギンテツ」に向けて連日練習をおこない、8月23日（金）から6日間9ステージの上演をやり遂げ、本年度の実に多い活動を盛況のうちに終了しました。

来年度の参加を望む声も多数あることもあり、なにより若年層の指導には継続性が求められるので、来年度も引き続きマシュマロ・ウェーブが担当しなければならぬ、という気持ちが強くわきあがっています。

芝居塾『ギンテツ』

文：虹の素 木之枝棒太郎

今年はABの2班体制。芝居塾は毎年参加者を募り、役者として裏方のサポートまで行っていく、TAK（神奈川県演劇連盟）と青少年センターで長らく続けている夏の一大イベントです。僕たち「虹の素」も2015年に公演を担当させて頂き、その時は色々なことが大変ではありましたが、神奈川の未来を担う若者たちと一緒に芝居を作れたことはとても充実し、また劇団としても大きな力がついたと確信できる企画でありました。

今回の担当劇団は「マシュマロ・ウェーブ」。なんと、TAKに加盟してから一年目での担当。宮沢賢治生誕123年の今年、未完の名作「銀河鉄道の夜」を、マシュマロ・ウェーブ主宰の木村健三氏が脚色・演出を施し上演しました。今年は12人という例年よりも少ない出演者のなか500名の集客を集め、閉塾後に塾生のうち2人が劇団に入ったとのことで、「芝居塾」の企画として大成功という形で終わったのではないのでしょうか。

さて、今回の芝居塾2019「ギンテツ」の目玉とも言えるのは、塾生たちが生き活きと演技をする姿である。AB班ともに脚本は同じではあるものの、Wキャストで2名入れ替わっているだけ（役名で言えば）。だがそれだけでギンテツの世界は一変する。キャラクターが強調され、引き出されているA班。流れゆくような演技を真剣に見入ってしまうB班。共通のキャス

トが多いはずなのに、なぜか違う作品を観ているような感覚。それはどんなWキャストの舞台にも言えることのはずなのに、今作品では全く違う世界を体感することができた。

宮沢賢治の作品をほとんど知らない状態で、同じく「ギンテツ」を観劇していた自劇団（虹の素）の若手たちは「前情報を少しでも持って観劇したかった！！」と悔しがっていました。過去にこの作品を中学生たちと共に作ったことがあります。やはりこの原作の物語を知っているかないかで、観劇する者の深みが大きく変わります。この「ギンテツ」観劇を機に、「銀河鉄道の夜」の原作を読んだお客様も多いのでは。そして、この作品は若者との相性がすごくよいのです。若い人たちのピュアさ、美しさ、クリアさがそのままストレートに増幅され生きてくるので、その2つの意味でもこの作品をやった今年の芝居塾はとてもいい芝居塾だったなあと思います。

そして僕が心打たれてしまったのは、現実のジョバンニの存在感。独特な雰囲気、存在、動き、その全てが両班に合致し、2つの違う作品を繋げている。このジョバンニの作る雰囲気と息づかいが、ラストシーンで感動へと導いてくれている。きっとここまで築きあげるまでに塾生たちが奮闘し、その成果が輝きを生んだ作品であったと言えます。

また音響は効果音のみで音楽は全て生演奏。導入で

現れたフルートとハーブの演奏もこの「ギンテツ」の空気と世界観を作り上げる上で無くてはならないものだった。純粹に演奏に聞き入り、宮沢賢治ワールドへと入りこめた。

今回はスタジオHIKARIという小さな空間で2面客席・円形舞台での上演。これが客席と舞台との境界線をなくし、劇場内にいる役者と観客全員が一体となって同じ世界の中で生きていると感じた。小道具などについていたライトや、舞台上に貼られていた星形の蓄光などの細かなこだわりも、観客が作品に入り込めるアイテムにもなっていて僕は好きでした。

改めて、神奈川演劇界にはTAKがあるということ、芝居塾という企画があるということが本当に素晴らしいと思った。もっと大勢の人に舞台とかこんな場所があることを知って欲しく、そして学生がそういった経

験をできる場所が神奈川にはあるんだということも知ってほしいし、経験してほしいと思った公演でした。来年以降もこの企画が盛り上がっていくのを楽しみにしています。



芝居塾『ギンテツ』参加者の声

今まで、演劇を続けていくことやこのまま大人になることに何となく不安がありました。『ギンテツ』はそんな私の背中を強く押してくれたと思います。「僕もうあんな大きな暗闇の中だって怖くない」というセリフは、将来に対する今の気持ちそのものです。この舞台が上演できたのは講師やスタッフとして関わってくださったTAKの皆様のお陰です。神奈川で演劇を繋いでいる方々の姿は私の明確な目標になりました。私もいつかその一員になれたらと思います。(加藤志織)

約4ヶ月間、芝居塾で様々な形で演劇と触れて思ったことは、やっぱり演劇って楽しい！ってことです。4ヶ月間やってきて感想それかよって思うかもしれないですけど、みんなで1つのものに向かって全力で取り組むことがこんなにも楽しいんだってすごく感じました。このメンバーで演劇ができて、私はきっと世界で1番楽しい夏を過ごせた受験生だったと思います(笑)。芝居塾に参加できて本当によかったです。ありがとうございました！(金子琴音)

まず、楽しかった。本当に好きなものに対する知識欲が埋められていって充実していた。成果発表の感想や「銀河鉄道の夜」に対するイメージを擦り合わせていくと、他人が消化され、自分のものになる。お互いがわかり合えて嬉しかった。仲間とは、離れたくない、一緒にいたいと思う一方で、芝居塾は芝居塾、これからと違うという割り切った思いもある。思い出や経験としてしまっておき、新たな経験を積んで成長していこうと思う。(小島蓉子)

私は今芝居塾ロスでたまらない。これほどまで芝居と向き合える環境を作ってもらえることはそうないだろう。4ヵ月という期間の中で様々なことを自由に挑戦させてくれた。自分の考えていることを表現することの楽しさを改めて感じる事ができた。本当に演劇が好きな人たちが集まった特別な空間で芝居ができたことの喜びは言い尽くせないほどの体験だった。青少年の皆はぜひ参加してほしい。きっと芝居が楽しくて堪らなくなるだろう。(中川内瑠奈)

TAK IN KAAT

劇団よこはま壱座『パーマ屋スミレ』 作:鄭義信、演出:濱田重行



2019年10月18日~20日 於:KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ 文:劇団よこはま壱座 濱田重行

今回でTAK in KAATは4回目です。いままでKAATは他の劇場とは違うんだという気持ちで使っていましたが、何度も使っているうちに、なんだかいろいろと疑問がわいてきたり、解せない思いでいっぱいになったりと、恰度この原稿を頼まれたと言うことで、忌憚のない意見を展開させていただくこととします。

TAK in KAATは、地元劇団に場所を提供するという趣旨で始められました。劇場使用料は無料、しかし売り上げの15%を納付。それに加えて諸費用も掛かるために、やはり劇場に馴れていない劇団だと使うには難しいだろうなというのが、感想です。

そもそも、人数が少ないアマチュア劇団（アマチュア=素人ではありません）では、役者も裏方をやり、かたや演出が舞台監督を兼任したり、照明・音響は劇団内、ましてや役者と表方（制作）を兼ねるなどと言う芸当は、専門劇団では考えられないことでしょう。それだけでなく、「素人か！」と劇場スタッフにあからさまな蔑みの目で見られたら、いままで小さい小屋でやって来た劇団にとっては、そのハードルは高くなる一方で飛び越えることは出来ません。そのためには、各ジャンルに精通したスタッフに頼るしかないことに

なりますが、そこでもある問題が起きてくることになるのです。劇場使用に伴う「安全」、劇場の安全面とのせめぎ合いという問題です。

KAATでは、照明機材を仕込んでいる時には、ヘルメット使用はもとより、その下での作業は出来ません。安全面から言えば当然ですが、照明のエリアをくぐり抜け、下での作業を並行してやることは可能でも、危険だと言われれば、額くしか有りません。安全を期することに異論を挟むことは、なかなか難しい。「じゃあ、事故があったらどうするんですか、なんかあったら誰が責任をとるんですか？」という、「なんかお化け」の出現です。いわゆる劇場では、よーいドン状態で全部の仕込みが始められ、合間を縫って仕事が進んでいきます。しかし、KAATでは安全面を配慮して、同時作業はしていません。それは安全面では誠に結構なことで、事故によって不幸な事態が起きることが、最小限に抑えられているわけです。ですが一、制作面では、照明・大道具・仕込み要員の人員を一日分多く出さなければならず、その費用は少なくありません。安全はなかなか痛いところですよ。ヘルメット着用は当然のこととして、緩和策はないものではないでしょうか。

劇場運営を経験してきた者として申し上げれば「TAK in KAAT」が、自主事業という形で運営されてきたのか疑問です。はっきり言って、県との関係において自主事業の枠には入れているとはいえ、「貸し小屋」としか思えないホール運営に疑問を感じます。紙数の制限で細かには記せませんが、KAATで企画した自主事業だったら、きっと言われていないだろうなという事柄が多く、管理だけの公会堂と変わらないような気さえたのです。劇場機能については、劇場側としても言い様がないところでしょうが、せめて運営に関してはもう少し利用者側に立ったところがあってもいいようにも思えますし、創造

を支援する劇場には思えません。きっと自主企画劇団や、有名劇団にはそういう場所なのかもしれません。でも、東京の劇場ではないのですから、ローカルな神奈川にあった運営がされてもいいと思えるのです。少なくとも、使い慣れていないアマチュア劇団に対して、KAATなりのサポートを強め、アマチュア劇団にも広く使用して貰い、劇団の芸術性を広く県民に広める——といったような趣旨を意識してこそ、TAK in KAATの趣旨であり、いい作品を生み出す劇団に、創造面でサポートする劇場であって欲しいと願うのです。

TAK in KAAT 『パーマ屋スマレ』

文：劇団唐ゼミ☆ 中野敦之

愛おしくなるような舞台だった。常に良質な劇を創り続けるよこはま壺座が、今回も鄭義信の『パーマ屋スマレ』を得て、1960年代福岡で起こった三池炭鉱炭塵爆発にまつわる人々を、「アラン峠」と呼ばれる街を、生き生きと活写してみせた。

物語は、韓国併合を背景に徴用工として三池炭鉱にやってきた高山洪吉とその家族を中心に展開する。初美、須美、春美の三姉妹とそれぞれの配偶者や仲間たちは、「家族の中に三十八度線が引かれ、おまけに玄界灘まで横たわっていた」と語られる通り、韓国、北朝鮮、日本、帰化した日本籍、という面々が寄り集まって生活している。長女・初美の息子・大吉が長じて銀行マンとなった未来の視点から、故郷に想いを馳せるという仕掛けでストーリーが進み、貧しくも連帯感にあふれた集落が、炭鉱事故の後遺症や石油エネルギーへの移行に喘ぎながら置き去りにされていく物語でもある。

まず、配役が良い。ポッチャリ型の少年「大吉」を弾むように演じた山茶花。「洪吉」役の城戸は集落に根を降ろすような居住まいで、彼の引越しがアラン峠から一つの魂が喪われていくのを体現する。労働争議を支える木下（小川）の実直さ、初美との不倫が暴露されてしまう若松役（黒川）の生真面目さと可笑しみに至るまで、全ての役柄に血がかよっている。鄭作品の美点として、激しい諍いや悲劇的な事件の只中にあえてコミカルな所作や科白を忍ばせる巧みさが挙げ

られるが、役者たちはこれらを余さず生かしてみせる。悲劇は滑稽さのスパイスを得ていよいよ哀切極まる。このあたり、いかにも芝居巧者である。

ステージは一貫して須美の営む「高山厚生理容所」を舞台に進行するが、大胆な省略と細部への作り込みのバランスは流石である。「理容所」のシンボルたる床屋椅子の造作や舞台上手へとゆるやかに昇るアラン峠の配置は劇全体の勘どころだが、共に押さえるべきところを押さえている。また、家屋や水道場のたもとから生える苔が、この集落の雰囲気醸すのに絶大な威力を発揮している。衣裳への配慮も素敵だ。成勲が着る赤やアロハ柄のシャツに白のズボン、先の尖った革靴は、かつて彼が花型鉱夫だったことを思わせ、現在の苦境を際立たせる。三女・春美が困窮してゆく時、衣服もまた白から茶へと地味な配色に変遷にしてゆく。上手い。

劇の終わり、人々はそれぞれの故郷に還り、また故郷を偲びながら命を散らせる。その中にあり、唯一この「アラン峠」を故郷とするのが語り手の大吉である。彼の地を想う大吉のたったひとつの救いは、今も愛する須美おばさんが生きて、時々は缺を持つことだ、と言う。「パーマ屋スマレ」とは、須美がいつか開業したいと憧れ続けた美容室の名前だ。ラストシーン、大吉の追憶の中で、その夢は叶えられたかのようにも見えた。優しく、痛ましく、美しい終幕である。

劇団紹介

神奈川県演劇連盟に新規に加盟した劇団を紹介致します。

G/9-Project

1988年、前身となる劇団『劇団GARAKUTA』が旗揚げをし、1992年『9月製作所』という劇団と合同プロデュース公演を行ったことを機に翌年合併。劇団GARAKUTAの『G』と9月製作所の『9』をとって『G/9-Project』として運営を始める。活動は横浜周辺の公共施設をお借りして稽古し、同じく横浜近辺の劇場をお借りして、年間2～3回のペースで公演を行う。座付き作家の仲尾が脚本を担当し、シリアス・コメディ・SFやファンタジーなどジャンルを問わず作品を発表し続ける。2019年現在20代～50代のメンバーが在籍している。また、座長である佐藤の個人事務所、G/9プロジェクト事務所に在籍する俳優たちもファミリーとして活動している。一時神奈川県演劇連盟に加盟していたが脱退、2019年に再び加盟する運びとなる。



ムームー企画



2012年に旗揚げし、神奈川県横浜市を中心に活動しています。主宰の岡村が、劇作と演出を担当。工場、オフィスなど働く人々が登場する物語が多く、淡々とした会話劇が特徴。

日常の風景から、それぞれの抱えるものが静かに浮かび上がっていき、言葉から少しずつ想いが溢れてくる、そんな芝居を作っています。

2014年までは、公演の度に役者を集める岡村の一人ユニットでしたが、2015年より劇団になりました。

神奈川県立青少年センター・演劇資料室をご利用下さい

演劇資料室では、外国や日本の戯曲をはじめ、演劇雑誌等多くの演劇図書を取り揃えており、戯曲などの無料貸し出しもしています。ご利用は1回3冊まで、2週間借りられます。また、神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録等もございますので大いにご活用ください。皆様のお越しをお待ちしております。(開室は火曜日から日曜日。午前9時から午後10時です。)

神奈川県立青少年センター 2階 演劇資料室 〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘 9-1 電話：045-286-4485

僕らの演劇

まりこ☆みゅーじあむ

「あ・い・た・い」 作/演出:川井真理子
2019年8月22日 於:かなっくホール

まず、マリリンの声がいい。子供たちが受け入れやすく心地の良い声は、子供たちと直ぐに温かい楽しい空間を作り出していた。遊び場に来たような雰囲気がかなっくホールの舞台に流れていたのも心地よかった(もしかすると、例えば青少年センターHIKARIの方が似合っていたのかもしれない)。



席が後方だったせいか子供たちの表情が見えなかったのが残念だったが、子供たちの顔はきっと楽しそうな笑顔で夢中になっていたにちがいない。その証拠に出演者たちの顔が子供たちの鏡のように楽しそうだったから…。私といえばストーリーを追うより子供たち・親御さんたちの表情を見ているのが楽しかった。親たちはきっと子供たちの笑顔がたまらなく楽しかったに違いない。

初めて触れるお芝居としては、大成功。いつまでも続けていて貰いたいシリーズだ。強いて言うと前半に盛り沢山の遊び企画があった為時間が少々長くなり、子供たちの集中力に疲れが出始めていたかもしれない。もう一つ、朗読の二文字があるのだから致し方がないのだけれども、やはり演者が本に目をうつしていたのがもったいなかった。その空いた手や目で、その分子供たちとコンタクトができるかもしれないし、などと思った次第である。子供たちとの芝居は直に反応が返ってくるから怖い。でもだから面白い。私も子供たちとのこのような時間は大好きだ。

劇団河童座 横田和弘

発するときのエキセントリックな抑揚は衝撃のものだった。そして主演を務める、西田好美氏の演技は観劇するたびに惚れぼれとする。女優という名に相応しく、追求された役作りや所作、圧巻ものの滑舌の良さには一演劇人として感銘を受けるほどだ。



ストーリーはざっくりと、フランソワーズという夫人が夫のリシャルの暴力に耐えかね、リシャルに瓜二つな弟ミシェルを利用して離婚を計画するというものだ。物語はここから真実に向かい動き出していく。シーンは終盤に差しかかる。フランソワーズ夫人の計画に賛同し協力していたように見えていた家政婦と法律家、そして弟のミシェルという人物たちは戸籍や職歴を見ても、そんな人物は存在しないという。そう、元から仕組まれていた罠だったのだ。頼みの綱であった、心優しいミシェルはおらず全てはリシャルの一人芝居であり、このような手口で悪行を働く詐欺集団による完全犯罪であったのだ。これで物語が終わるのかと思いきや、ここから逆転のどんでん返しが始まる。悲劇のヒロインに打ちひしがれていたフランソワーズ夫人の正体は、なんと国際警察だったのだ。形勢は一気に翻し、リシャル率いる詐欺集団の逮捕に及んだのだ。

この劇を観て『W』というタイトルから連想されたのは、人間の二面性というものだった。言うなれば、リシャルのみならず主要人物全員が一人二役のようなものだった。キッチリと二面性を表現しきれていて、観劇後の満足感もあった110分の上演。すこし長めの作品だからか、客席の座布団が二枚重ねになっていて客への配慮が行き届いていた。音響・照明のテクニカルも違和感無く、芝居心を使っているようにも思えて良かった。

ラスト1分で覆る逆転の物語、TEAM IMITATIONが提供する『W』。興味深く、映画を観ているように面白い演劇だった。
虹の素 鍛代絃夢

TEAM IMITATION

「W」 作:ロベール・トマ、演出:寺師涼
2019年9月20日~23日 於:スタジオHIKARI

今回はなんと遙々フランスからの戯曲だそう。異国情緒があふれる日本戯曲には見受けられない言語感覚を確かに感じた。役者が、しっかりと作風を理解していた為、聞きなれないセリフも耳障りにならず、日本人が海外戯曲に挑もうとする姿勢の違和感も感じなかった。

さて、『W』というこのタイトルから何を連想するか。この劇の魅力は、なんとと言っても市原一平氏の一人二役による芝居。長身から繰り出される荒々しい演技とセリフを

プラスチックな月

「大江戸・おん・えあー」作:古典落語「軋失気」「あくび指南」より演出:福本ぶう之介
2019年9月28日 於:平塚市中央公民館大ホール

幕が上がると、舞台の中央には台座に赤い座布団。着物を着た男がそこに座れば、落語が始まる…かと思いきや、始まったのは落語をベースに、時代背景などお構いなしに現代の言葉を盛り込んで更なる笑いに変えていくプラスチックな月(以下「プラ月」)ならではの現代×落語のハイブリットコメディ。今回はつい知ったかぶりをしてしまった和尚が小僧の知念

に一杯食わされる「転失気」と、習い事が続いたことがない男があくびを習いに行くという「あくび指南」を、プラ月風にアレンジした痛快コメディでした。



まず前説から始まるプラ月エンターテイメント。笑わなければタピオカミルクティーを飲む時に「けほ」とむせる呪いがかかる…既にその脅しから笑いを誘います。この劇団の公演で毎回出てくる歌ネタは最早鉄板で、今回の公演でも2人してマイクを握りしめて歌い出した時には、「この人たちはまるで舞台上で遊びに来たかのような劇をするな」と見ている側も楽しさを感じました。

2本目の「あくび指南」では、あくびの稽古だけではなく、大胆に現代での「ツンデレ指南」が同時進行していく流れ。まさしく落語を現代風にアレンジした話となっており、より「あくびの稽古がいかにくだらしないものか」が浮き彫りになったのではと思いました。ただ、元々の話に合わせて現代でも女の子2人の話にしたのかと思いますが、オチのインパクトが若干弱いように感じました。あそこは男女の方が、よりラストの連れの友達の方がツンデレの才能があるシーンが際立つのではないかと個人的に思いました。落語の話がベースとなっていますが、役者の絶妙な間の取り方や、ボケとツッコミの軽やかなテンポ、随所に練り込まれた小ネタの数々が、この舞台を親しみやすいものに作りあげていました。何より私が個人的に好きなのは、台本にあるのか本当にアドリブなのかかわからないボケの数々。「台本にないことしないでくださいよ！」という所謂メタ要素のある台詞が出てきますが、アドリブにしては自然なボケとツッコミ。しかしリアクションに役者の素や新鮮味が感じられ、むしろこれが台本通りだとしたらお見事です。落語を見たことがない、興味がない、そんな人でもこの劇を見れば自然に興味湧いてきます。私も実際にその1人です。

劇団「無題」 マリー

G/9-Project

「ミスキャスト～アメリカから来た弟～」 作/演出:仲尾玲二
2019年10月11日 於:山手ゲート座ホール

10月12日に上陸する台風は様々な影響があった。G/9-Projectの公演も然り。2日目の公演が

中止になってしまった。そんな中、初日の昼の公演の会場に辿り着くと、思ったよりお客様が席を埋めていて安心した。ゲート座の会場に入りセットを眺め、ついつい、どんなものが置いてあるのか気になってしまう。

ミラーボール、ドアや暖簾の出入口、椅子の他、壁際に並んだBOX、犬のぬいぐるみ、壁に貼られた樹木。樹木の横に跳ぶ青い鳥。これらのものが、舞台上でどのように展開されるのか楽しみなのである。

一人暮らしのアラフォー女性早苗は、漫画「どす恋相撲道」の2. 5次元ミュージカル俳優の推し仲間、オタ活仲間がいて、それなりに充実した日々を送るが、物足りなさも感じている。そんな早苗の元に架空の家族をレンタルする無料モニター当選の通知と担当者がやってくる。当選通知を読んだ直後、間髪入れず暖簾の向こう(台所?)からやって来る男女の担当者がもう、怪しくて面白い。男性はスーツ。女性は魔女のような風体。担当者に言いくるめられ、「弟」をレンタルすることに。この「弟」も顔を黒く塗り白い帽子に白スーツという怪しい風体、そして、サブ



タイトルに～アメリカから来た弟～とあるようにカタコト言葉で喋る。「レンタル家族」ものは結構みるが、G/9-Projectの「レンタル家族」ものは一味ちがう。

その「弟」を天国に行ってしまった早苗の犬の名前で「リキ」と呼び楽しく過ごしている所へ、大晦日のイベントに出向くオタ活仲間3人が合流しドタバタ劇が始まる。怪しい雰囲気のある担当者やレンタルの「弟」の風体と比べると、「普通」でも良いと思うが、早苗のオタ活仲間・友人としての個性がもう少し欲しかった。座長作の、オリジナル曲2曲。ギターで演奏し登場もする。ミラーボールの明かりの中全員で歌って踊る。大晦日はこうでなくちゃね、と楽しく、ワイワイ～で物語は終わらない。終盤、早苗の所に「リキ」から電話がかかってくる。天国に行った飼い犬「リキ」からなのか?と匂わせる場面。仕事として「弟」を演じる人間と、天国へ行った犬の「リキ」が混在する。そんなファンタジーなレンタル家族ものがG/9ふうなのだ。大晦日には、こんな魔法にかかりたい。G/9の十八番作品「ミスキャスト」、楽しませて頂きました!

まりこ☆みゅーじあむ 川井眞理子

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』●ガムシャニズム●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団おらんだ●劇団河童座
- 劇団かに座●劇団唐ゼミ☆●劇団こゆるぎ座●劇団砂からマカロン●劇団820製作所●劇団「無題」
- 劇団よこはま壱座●劇団横濱にゆうくりあ●G/9-Project●studio salt●TEAM IMITATION●虹の素
- プラスティックな月●マシュマロ・ウェーブ●まりこ☆みゅーじあむ●M.PinK(ミュージカルプロジェクトin神奈川)
- ムームー企画●Y.S.ベアフットシアター●横浜小劇場(横浜演劇研究所付属)

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>